



2011年11月 ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードと共に 聖人の民をつくる



I. 「師の生涯唯一の目的：神を愛し、愛させること」

エミール・フォール, sm (1865-1937) は、「ボン・ペールの弟子たちが師について語るもろもろのことを聞き、師の伝記と師が書いた多くの手紙を読んだ後で」このように明言しています。(Positio, p. 444)

そのようなわけで、列聖省は、詳しく検討した後、1973年10月18日、次のように宣言しています：

「間違いなく、神のしもべ、G.-J. シャミナードは、英雄的程度において、信徳・望徳・愛徳の対神徳と賢明・正義・節制・剛毅の枢要徳を、神に対しても隣人に対しても実践した。」

シャミナード師の聖性はその全生涯を通して垣間見えます。未だ子供で、ミュシダンの生徒であった頃も、その長い祈りの時間に人は気づいていました。師はサン・シャルル修道会に入り、そこで「完全な回心と神に対しては何も拒まない誠実な意志」と「私たちの主イエス・キリストを知り、模倣し、愛し、イエス・キリストと一致する領域まで達する」(EPI, 1) 意志を志します。師はこの考えを忠実に保持します。そして、1839年のマリア会会憲は明瞭に言い添えます (n. 4) : 「マリア会が第一の目標として目指すキリスト教的完徳は、本質的に、人々の模範となるために人となられた神、**イエス・キリストとのできる限り正確な一致**である。」1983年の生活の規則は、そのことを次のように表現しています：「マリアニストの召命を通して、私たちは、人々の救いのためにマリアの子となられた神の子イエス・キリストに特別な仕方であらう招かれている。それ故、**私たちの目的は、キリストと一致した者になること、およびみ国の到来のために尽力することである。**」

(n. 2) それは、マリアニスト家族の中の聖性のすべての形に間違いなく当てはまりますし、それはつねに変わることなく、洗礼を受けた者の生活の完成の域です。

1841年、総長の職を辞したあと、師の長上となったかつての協力者たちの反対が増長する四面楚歌の中、師のキリストの模倣は、間違いなく師の忍耐と粘り強さの最高潮に達するまでになります。ジュスタン・デュモンテは書いています：「そうです、私たちの創立者は、その晩年、自分の子供たちから来る辛苦をなめ尽くしたのです。」(Vasey, *Dernières années*, p. 153)

それにもかかわらず、これと同じ時期の1844年の終わり、シャミナード師は書いています：「マリアのみ名がたたえられますように・・・戦いは私にとって屈辱的なものになっていますが、そのことで私は、天国のため、また、私の罪の償いのために何かを得たのだと思います、そのように願います。十字架につけられた神に対する愛のために、人の感覚では、さげすまれ、打ちのめされて死ぬということは何としかわせないことでしょうか。」(*Positio*, p. 336)

さらにまた：「私が自分自身に完全に死ぬことがなければ、全く無用な者、有害でさえある者として根底的にさげすまれ、拒絶されることがなければ、どうしてマリア会が持続し、会員の数が増えることがありましょか。主のみ名だけがほめたたえられますように！ み母の名がいたるところで知られますように！」(手紙 VI-1413, 1845.11.23)

II. 感染する聖性

ボルドーのマリアのコングレガシオンの何人もの会員が証言しています：「コングレガシオンの集まりで、シャミナード師がキリスト教の徳について本当に強い信念をもって私たちに話してくださいましたので、**私たちは、私たち自身の善と魂の救いのために心が燃えているのを感じたほどでした。**その結果として、集まりが終わるときには、神のためには何でもする気持ちになっていました。」(*Positio*, p. 437)

さらにまた：「シャミナード師が至聖なるおとめマリアについて話しておられたとき、人々の心を感激で大いに高揚させましたので、一人が素朴に興奮して、マリアさまのものであることは本当にすばらしいことです、終生誓願以上の誓願を立てることはできないものでしょうか、と言ったのを覚えています。私自身、師の傍らでお祈りをしながら、師の聖母マリアに対する信心がどんなに熱く、他の人に伝わりやすいものであることを感じました。時々、私はマドレーヌの在俗のコングレガシオンの祝いに出席しました・・・あの人たちのなんと立派な立ち居振る舞いでしょう、あの人たちはなんとすばらしい信心を持っていることでしょうか！ 彼らの真ん中にいる敬うべきお年より以外の誰が彼らにマリアに対するこのような愛を吹き込んだのでしょうか。」(P. Ch. Demangeon, *Positio*, p. 423)



師の信心、師の熱誠は、その文書からも判明します：「私の親愛なる子供、勇気を持ちましょう！ 力の限り、うまずたゆまず・・・ そう、働きましょう。ご存知のように、私の大望はフランス全土に神への愛の火をともしことです。主は、あなたが住んでいる私たちの祖国の地で、あなたが持っている手段、あなたの力によって私を助けるために、あなたを選ばれたのです。そうです、ですから、あなたの周りで、この火をともしよう努めてください。あなたの周りにいる若者たちの心にこの神の火を吹き起こしてください！ それは、彼らに対する何とすばらしい奉仕でしょう。彼ら

を天の炎で燃え立たせることによって、あなたはこのかわいそうな若者たちを救うことになるでしょう。この若者たちを主はそのおん血で贖ってくださいましたのです。そのおん血は、私たちの母マリアが、その愛のすべて、その情愛のすべての対象である、ご自分のみ子を彼らのために十字架上で犠牲として捧げることによって獲得されたものです。そうです、順境のときも逆境のときも、この神の火を吹き起こしてください。」(手紙、II-382; 1825.12.5)

III. 民のあかし

これは、シャミナード師の根本的な信念です。私たちは、今日、一緒になって福音の力を証ししなければなりません。このことについて、師は一度ならず自分の考えを説明しています。

「同じ宗教、同じ徳、同じ生活慣習を表明する集まりがない限り、宗教心を持ちかつ誠実な何人かの人たちがいても・・・分散して孤立しているならば、若者全体が必要としていることのためには、ごく非力な模範にしかならないでしょう。一方、若者たちの周りにはありとあらゆる危険が言わば山のようにあるのです。」(シャミナード師の文書と言説、I-43, 32-33, 父親たちに宛てて)



「徳のある人が(ひとり)光を放っても無駄です。彼の真似はできないうごく普通に言われます。人は彼の中に、自分たちとは違った別の心、別の器官、別の気質を持っているのだと想像するのです。徳は、みんなが一緒になって身につけることのできる果実ではなく、特異な現象であると彼らには見えるようです。このいまわしい偏見を弱めたり、なくしたりできるのは徳を備えた人たちの集まりしかありません(・・・)キリスト者がコングレガシオンとして組織されることを願っています。そうすれば、コングレガシオンの中から一般のひとたちの注目の対象となる一種の光のようなものが輝きでるでしょう。(・・・)集まりが広まり、人数が多くなれば、より多くの人たちの耳目を集めるでしょう。宗教と何か、と問う人たちにより多くの門戸を開くことになるでしょう。」(Ibid, 34...36)

「コングレガシオンとは何ですか

答え：それは、**初代教会のキリスト者を模倣する**ために、頻繁な集まりによって、みんなが一つの心、一つの魂(使4,32)を持つこと、ただ単に神の子、イエス・キリストの兄弟、神秘体の肢体としてだけでなく、マリアに対する崇敬のために特別に奉献し、マリアの汚れなきおん宿りの特権を明白に表明することにより、マリアの子として、ひとつの同じ家族を持つことを志す熱心なキリスト者の会です。」(文書と言説、I-58, 1)

集団で証しすることが重要であるとするこの信念は、世代間を含めて会員間相互の真の連帯と競争の源泉ともなります。父親の(コングレガシオンの)総則からの抜粋は既定しています：「若い人たちにとってこれほど有益で、社会にとってこれほど貴重で、また生活慣習と宗教にとってこれほど利点の多い(青年のコングレガシオンの事業)がどれほどすべての父親にとって大切なものであるかを考慮して・・・私たちの指導者がボルドーで設立し、指導している青年のコングレガシオン

の成長と完徳がこれからの私たちの心の事業になることを私たちは宣言した。従って、このコングレガシオンの若い人たちにかかわりのあることであれば、何であれ私たちにとって他人事ではない。
(・・・) 彼らの信仰心の教化や市民社会における彼らへの支援のために働くことは私たちのとても大切な心の義務である。」(文書と言説、15, 1)

修道会も同じ直観にその基をおき、エルサレムの共同体に着想を得ることになります：

「会の主要な精神は、・・・**聖人の民の光景を世に示す**ことであり、また、初代教会におけるのと同じように今日においても、福音が、精神と言葉の厳密さにおいて、実践されうることを事実によって証明することです。」(手紙、II-388, P.-B.Noailles 宛て、1826.02.15)



IV. 生活全体を聖化する

師は信徒に勧めています：

「完徳へと進む心の糧は、1) 聖書を読むこと、2) 信心書を読むこと、3) 教えを受けること、4) 秘跡を受けること 5) いろいろな信心業を行うこと、6) キリスト教的愛徳の業を実践すること、です。」(文書と言説、I-43)

特に、師は、生活とミッションのすべての側面を網羅する「**三部門**」を考案しました：
霊生(霊的生活とミッション)；教育(養成と教育活動)；財務(財産の管理)。これは単にひとつの組織の形ではなく、ミッションのため、また、聖化を目的とした、私たちの生活のすべての次元の統合でもあります。霊生、教育、財務の補佐にふれて、師は書いています：「それぞれが、会のすべての会員が自ら選んだ聖なる身分の精神に速く進歩することができるように、必要な教則を備えています。」(手紙、III-716, 1833.12.4)

経験に富みかつ現実的であるシャミナード師は、純粹に霊的な聖性ではなく、私たちの全存在を包括し、また霊的、知的、物的そして社会的な私たちの存在のすべての側面にかかわる聖性を頭に描いています。

本月の記念日：1日、諸聖人

6日、マドリッドのマリアニスト殉教者

12日、シャミナード師、マドレーヌ担当司祭に任命される

(1804年)